

IBN 会議 2015 年 5 月 報告

石川 恒夫



「バウビオロジーに根差した健康と持続可能性—共にビジョンと解決を探し、情報を共有しよう。勇気をもって！」というモットーのもと、2015年5月15-16日にドイツ、ローゼンハイムのバルハウス（バレエ学校）で IBN(バウビオロジー・サスティナビリティ研究所)主催による「バウビオロジーと持続可能性」の会議が開催されました。世界各国から、といってもよいでしょう、270名の参加があり、下記のような講演者が登壇しました。会議のテーマが集中して取り上げられたのみならず、バウビオロジーが社会に根付きつつあり、またさらに今後求められることを見出すことができました。持続可能な（サスティナブル）そして未来に希望をもつ社会をつくるために、バウビオロジーは益々理解され、受け入れられるでしょう。

以下のテーマでの講演が並びました：持続可能性、エコ収支、都市＝景観、土建築、建築文化、住居プロジェクト、ホリスティック医学、バウビオロジー測定指針 2015、デジタル・バーンアウト、子どもたちとの未来創生プロジェクト。

開会のあいさつにはローゼンハイム市の副市長アントン・ハインドル氏がみえました。ドイツ周辺、また海外からのバウビオロジー活動報告があり、講演者らと会場によるディスカッションの時間、会場内での商品・出版物のブースが並び、また新しい IBN の見学ツアーも会議前後に開催されました。

講演：

- ・バウビオロジーと持続可能性：ヴィンフリート・シュナイダー（IBN 代表）
- ・新 IBN 施設の持続可能性評価について：ホルガー・ケーニツヒ
- ・都市景観：クリストフ・ビヨック
- ・土建築—建築文化—持続可能性：アンナ・ヘリンガー
- ・共同体はいかに形成されるか？：ジルケ・ミュンケンヴァルフ +ロニー・ヴィテック



ヴィンフリート・シュナイダーの紹介を受けるホルガー・ケーニツヒ



アンナ・ヘリンガー

- ・ホリスティック医学とバウビオロジー：バーバラ・ドローメ
- ・バウビオロジーとホリスティック医学：ヴォルフガング・メース
- ・バウビオロジーによる測定指針 2015：ヴォルフガング・メース
- ・デジタル・バーンアウト・ネットにおける操作：ペーター・ヘンジンガー
- ・青少年とのバウビオロジー未来プロジェクト：シュテファン・シュトライル+ザビーネ・マイヤー

『健康な住まいへの道』の著者であるホルガー・ケーニツヒ氏とも久しぶりの再会であり、「昨年肺炎になっちゃってね」と近況を話し、また今春来日されたクリストフ・ビヨック氏は元気でしたが、自宅階段から落ちて骨折し、松葉づえで登場！2012 年に来日されたヴィンフリート・シュナイダー氏は全体統括として多忙な日々を経て、初日の基調講演を終えてほっとしていたのが印象的でした。

講演タイトルからわかりますように、建築事例を示す講演は、建築家アンナ・ヘリンガーの土建築のみでした。ちょっと物足りない印象も受けますが、それだけバウビオロジーのプラットフォームが広いということでもあり、私たち日本が逆にやや建設行為の問題に傾いているように思えます。彼女(アンナ・ヘリンガー)は 19 歳で社会奉仕でバングラデシュで生活し、そこの村の建物にすごく引かれたといいます。「建物に抱きしめられて、この土の環境の中で保護されていると感じた。」その後彼女は大学で建築を学び、ディプロム(卒業制作)として、保育園/幼稚園、学校、職業学校に住宅と行政の建物が一体となったマスタープランを計画しました。とりわけ学校の計画について、彼女は土と竹を使った詳細な検討まで行い、その後それが実現され、アガ・カーン賞を受賞されたのです。バングラデシュでのその後の学校建設、上海のプロジェクトなどデザイン的にも魅力的な建築が紹介されました。さらに当地の生活支援として、現地で編まれたクッションを会場で売り、ただ「ハコ」をつくるだけではない、生活行為をも含んだトータルな住まいづくりの提案が責任という感情をもって実行されていることに感銘を受けました。



*参照 「バウビオロジー」35号に彼女の記事があります。

ヴォルフガング・メース氏らによる新しい寝室領域での「バウビオロジー測定指針 2015」については、これから翻訳したいと思いますが、数値そのものの変更はありませんでした。しかし、項目として新たに「光」が加わりました。まだ症例が少なく数値設定はありませんが、特に LED が普及しつつある今日、照明の閃光(ちらつき)がもたらす有害性が指摘されています。



ヴィンフリート・シュナイダー基調講演

外国からの活動報告：

- ・ミヒャエル・マイヤー (オーストラリア)
- ・石川恒夫 (日本)
- ・アクマン・アンド (トルコ)
- ・ペトラ・イエーベンス=ツィルケル (スペイン)
- ・ラファエル・クラインマン (ノルウェー)
- ・オレクスリー・ウルスレンコ (ウクライナ)

- ・トーマス・ゲルトナー（イギリス）
- ・マルティン・キャンプ（フランス）
- ・ジークフリート・カマナ（イタリア）
- ・ベルンハルト・オーバーラウホ（南チロル）
- ・ダビッド・アイアー（チェコ）



海外からのゲスト

2010年のバウビオロジー会議以来、喜びの再会を果たしたのはスペインのペトラ、フランスのマルティン、ノルウェーのラファエルでした。それぞれが地道に活動を継続しているとのこと。また以前電話でのみ話したことのあったオーストラリアのミヒャエルと初めて知り合うことができ、バウビオロジーの広がりを感じた次第です。ミヒャエルからはオーストラリアでも通信講座を準備中であるに加えて、環太平洋地域でのバウビオロジー会議を開催したいという希望が告げられました。ただし主言語は英語になると思われますが、もし英語圏で注目を集めはじめると、日本でも一気に脚光をあびることも予想されます。

スペインでは日本より一足早く通信教育講座を開始しており、大学院のコースに取り込むことで、受講料は極めて高いようですが、関心をもって受けとめられていることを聞くことができました。大学院のコースに組み込んでおりこともあり、2年の講座受講ののち、半年かけてレポート課題（自分でテーマを決める）に取り組むそうです。

日本からはおよそ以下のことを報告しました。

- ・日本バウビオロジー研究会が設立され10年が経過し、定例セミナー、会報誌を年4回継続している。
- ・通信講座が2011年10月から始まり、現在まで約50名が受講していること。修了者は13名。
- ・講座テキストの翻訳に数年かかったが、設備関係のテキスト[給排水、電気、暖房]などが一番難解であり、地域（国）の相違が顕著にでると思われること。
- ・相違があるとしても全体としてバウビオロジーは極めて普遍的・人間的であることを痛感。
- ・通信講座についてはこれからテキストの日本の事情に相応した補遺を充実することが課題。
- ・より日本に根差す上で、様々な媒体をとおしての一層の啓蒙が必要。
- ・省エネは日本の多くの関心であるが、健康問題がおざなりになる危険があること。
- ・木造に加え、土建築への関心が高まっていること。

ドイツ周辺から：

- ・ヨルク・ヴァッター（スイス）
- ・ヘルマン・ヤールマン（オーストリア）
- ・アルフレッド・ルードルファー（オーストリア）
- ・ホルスト・クリーベ+ウルリヒ・シュタインマイヤー（エコ・プラス）
- ・ヨッヘン・ディーフェンターラー
- ・ディートリヒ・モルデン+マルティン・ヴィルニヒ（ドイツバウビオロジー連盟）
- ・ヨアヒム・ゲルテンバッハ（バウビオロジー連盟）

出展社：

- ・ダネル（照明、電磁波対策）
- ・Gütter（ギュッター）自然建材
- ・レゲップ LEGEP（ライフサイクル分析ソフトウェア）
- ・エコ・ヴォーンボックス（家具と住まい）
- ・ソリーニョ（マッシフホルツ）
- ・電波予防協会
- ・BAU(バウビオロギー+建築+環境医学)財団
- ・ドイツバウビオロギー連盟（VDB）
- ・バウビオロギー連盟（VB）



ソリーニョ（出展ブース）

IBN のフェイスブックに以下のようなメールが届いています。

「素晴らしい会議に対して IBN に感謝。バウビオロギーとホリスティックな活動の契機として貴重な機会だった。新しい研究所施設にも祝福を。快適に感じたのは私だけではないだろう。」

「私達は正しい道を歩んでいることを確かめることのできる素晴らしい会議内容だった。」

下記アドレス（IBN）に会議の写真が掲載されていますのでご覧ください。

<http://www.baubiologie.de/impressionen-ibn-kongress/>



会場風景